

更埴条里遺跡・屋代遺跡群 に見る災害と開発

Disaster and Development as Seen in the Kōshoku Jori and Yashiro Sites

寺内隆夫

はじめに

①遺跡の位置と周辺環境

②縄文時代における氾濫低地の利用

③弥生時代中期における耕地開発の
の本格化

④古墳時代における水田域の拡大

⑤飛鳥・奈良時代における開発

⑥条里耕地の開発

⑦9世紀第4四半期の大洪水

⑧復興への道のり

⑨中世領主層による開発

⑩ほ場整備以前の景観形成

⑪小 結

おわりに

【論文要旨】

長野盆地南部では、千曲川によって形成された自然堤防と後背湿地を利用して、稲作を主体とする耕地開発が盛んに行われてきた。しかし、各時代に創出された耕地は、千曲川の氾濫による洪水あるいは寡雨な気候や千曲川の河床低下による旱魃などの被害を受け続けてきた。

本稿では、更埴市に所在する更埴条里遺跡・屋代遺跡群の発掘成果にのっとり、縄文時代から近代に至る環境の変化と各時代の開発方法、さらに災害との関係を、時代順に概観する。

氾濫と埋積の進む縄文時代においては、中期後葉に低地全域での炭化物量が増え、クリが急増する傾向が認められた。その要因としては、ヒトによる植生への干渉が進んだことが考えられる。

縄文時代晩期の堆積によって自然堤防と後背湿地が固定化されると、水田開発の環境が整う。大規模な耕地開発には、①弥生時代中期における低地林の伐採と水路掘削の開始、②森将軍塚古墳築造に近接した時期（古墳時代前期）における水路・小区画水田の展開、③郡司層の主導による古代（7世紀後半～8世紀前半）の河道内低地の水田化と各種産業の育成、④古代（9世紀代）における条里耕地の整備、⑤荘園領主によると見られる中世前半の畠地拡大、⑥屋代氏によると見られる畠地の再整備と旧河道・「島」の開発、⑦近世以降に認められる畠地の再水田化、があげられる。

しかし、9世紀後半の大洪水（いわゆる仁和の大洪水）を代表とする洪水被害、あるいは渇水などにより、新たに開発された土地において、長期間安定した水田耕地を確保できた例は存在しない。各時代ともに、有力者層が主導した大規模開発では、多大な投資や労働力の結集に見合っただけの成果を納められなかったのである。大規模な耕地開発が、いずれの時代においても災害や環境の変化に対処し切れなかったことは、今後の開発のあり方にも再考をうながすものであろう。